

4. 実験2 ポッドキャストの教育的利用—情報を発信する(安西担当)

4.1 はじめに

(1) ポッドキャストとは

ポッドキャストは、今、注目を集めている新しいインターネットを使った自己表現の手段である。これは、web上に音声データや動画データのマルチメディア・データファイルをアップロードし、RSSやAtom syndication formatsで更新情報を簡単にまとめ、配信できるシステムである。音声データファイル、動画データファイルの配信ともに活発であるが、動画データの場合は、ビデオポッドキャスト、ビデオキャスト、Vlogと呼ばれることもある。

この「ポッドキャスト」という用語は、iPodとbroadcasting(放送)を結びつけた造語である。このため、iPodとのイメージの結びつきが強く、iPodを使わないとポッドキャストが聴けないのではないかと、といった誤解を生みがちであるが、ポッドキャストは、PCでもiPodを含むmp3プレーヤーでも視聴できる。(ただし、ポッドキャストの動画利用では、PCもしくはiPodの特定機種ということになる。)このためポッドキャストを語学学習の視点から考えた場合、学習者が自宅もしくは学校でPCに向かいポッドキャストを聴く、あるいはモバイル学習として、mp3プレーヤーで聴く、iPodで音声・動画を聴くといった学習環境を選択しやすいという利点がある。

これらのmp3 playerの中で特にiPodは近年、若者の心を捕らえた機器であったといっても過言ではない。アメリカにおいては、National Retail Federation[8]が2006年に行ったBack-to-College Consumer Intentions and Actions Surveyで、大学生が新学期を迎えるための準備として、電気製品の購入が27.5%の伸びたことを指摘している。この牽引となっている消費として、特にフラットテレビ、Xboxと「iPod」とノートパソコンがあげられている。つまりiPodは2006年アメリカの若者文化の象徴的な機器のひとつであったということもできよう。

(2) 受信サイトとしてのポッドキャスト

ポッドキャストは、情報の受け手と送信者として、考察することができる。受信サイトに関しては、authenticな英語のモバイル学習およびPCでの学習と学習環境に幅ができることは先に指摘した通りであり、その教材は今やインターネット上に豊かに存在する。これらのポッドキャストは、安西担当(国際政治経済学部)の「リスニング」の授業で副教材として使用され、学生からポジティブな評価を得た。

(3) 先行研究

Anzai(2006)が「学生のインターネット利用状況」に関する一般的な調査を行った。

その中で、ポッドキャストイングに対して学生が大変興味を持っている事実と、個人情報に関してはくれぐれも注意して扱わないといけないことが明らかになった。（詳しくは Anzai, 2006[9]参照）。またポッドキャストイングをテーマにした研究論文はほとんどないので、授業での実践を行いながら、可能性を探っていきたい。

4.2 ポッドキャストイング（発信サイド）の授業実践

トレンドと学生の興味という追い風を受けて、ポッドキャストイングがどのように教育的に活用できるのか、第一段階として実践授業を行った。2006 年前期、マス・コミュニケーションをテーマにしている「言語文化特殊講義」で、マスメディアの一形態としてのポッドキャストイングについての講義・演習を行った。講義では、伝統的なマスメディアとポッドキャストイングを比較し、ポッドキャストイングの特徴について講義し、また、どのように作るかパワーポイントを使い説明をした。授業は CALL 教室で行われているので、学生がひとり一台のパソコンに向かい作業し、ポッドキャストイングのデータ（mp3）を作成した。個人情報に配慮し、最終プロダクトであるポッドキャストイングまでにはあえて至らず、最終的にどうポッドキャストするか方法を講義で補足した。また別の講義時間に、安西のポッドキャストイングを紹介し、クラスで視聴した。学生にどのようなポッドキャストイングを作りたいか自由記述のアンケートを行った。以下はそのアンケートの報告である。

4.3 結果と考察

ポッドキャストイングに対する学生の反応は、概ねポジティブであった。彼らはほとんど iPod を音楽を聴くことのみに使用している。彼らは好きな音楽を収集し、自分の行くところどこにでも携帯している。しかし利用は音楽に限定されているケースが多かった。（60 人中 2 人と少数派ではあるが、CNN を定期的にダウンロードし、視聴している学生もいた。）授業でポッドキャストイングを学習し、情報発信については、「いつも iPod を持ち歩いているが、こんなに簡単に自分が発信者になれるとは思わなかった。」という驚きの声や「こんなに簡単に世界に発信できるのなら、ウェブ上には巨大な情報があるに違いなく、私たちは、情報が本当かどうか気をつけなくてはいけない。」といったメディア・リテラシーにまで進展させ、感想を寄せた学生もいた。

また学生に何をポッドキャストしたいか、たずねると、「自分たちのバンドの音楽をポッドキャストして、多くの人に聴いてほしい。」「自分たちの作った曲をどう思うのか、感想を聴きたい。」といった感想が複数聞かれ、自己表現のツールとしてのポッドキャストイングへの期待の高さがうかがわれた。また「美術館を案内したい」「観光地を案内したら、地図がいらなくて便利だ。」「3 分クッキングをしてみたい。」「手話はテキストだけだとわか

りにくいので、動画のポッドキャストイングを使うとわかりやすくいいと思う。」「被災地が募金を呼びかけたらいいと思う。」などと自由な発想でさまざまな意見が聞かれた。また音声ファイル作成よりも、動画ファイル作成に関心が高かった。ポッドキャストイングについて、テキストを使用しての講義だけでなく、実際に一部データを作成し講義することで、学生の理解はより深まったものと思われる。

4.4 まとめ

ポッドキャストイングは、大資本を持たずして、個人が世界に発信できる可能性を備えた、いわゆる双方向性の web2.0 である。そのポッドキャストを発信するときにまず考慮しなくてはいけないのは、個人情報を守るといった壁である。

外部に発信する形式をとり、Collaborative Learning(協調学習)を行った実践例として Sajjapanroj ら(2006)[10]がある。Sajjapanroj(2006)らは、Wikibook を活用し、インディアナ州2校とテキサス州1校で協調学習を行っている。大がかりなシステムを使わずに、遠隔教育を実践している。この実践の中で Sajjapanroj らが、パスワードを使い、外部への発信をコントロールし、この協調学習を実施している点も見逃せない。教育がテクノロジーと結びつくことで、さらに豊かな教育の可能性が広がった良い事例である。

情報を受け手としてとらえることは、発信と比べてリスクが低いので安心感があるが、大衆に発信するサイドに立つことで、より鮮明にメディア・リテラシーを学べる可能性もある。インターネットの世界が浸透したことで、情報の真偽を各自が判断し、選択できるメディア・リテラシーがますます重要となってきた。Duncan(2007)[11]はメディア・リテラシーの基本的な8つの概念をあげているが、例えばその中のひとつである「メディアは構成物である」といった概念もポッドキャストイングを作成する過程で、体験できると思われる。現時点では、個人情報の制約もあるが、発信までに至らないまでも、実践が難しいところは講義で補いながら、マスメディアの発信と受信をバランスよく学習し、リテラシーを高めることが望ましいと考える。

なお2007年のMacworld Expo & Conferenceでアップル社のCEO、スティーブ・ジョブズがiPhone[12]の発売をアナウンスした。iPhoneは、海外では一般的ながら、日本ではサービスが提供されていないGSM/EDGE用の端末なので、日本での発売はまだ確定していないが、これは、iPodと携帯電話が連携した機種であるという点で画期的である。日本市場への発売が未確定とはいえ、これによりポッドキャストイングは利用しやすくなり、携帯電話を使ったモバイル学習の可能性がさらに広がったといえる。